

「帰る」の意味分析

— 「戻る」「去る」との比較から —

小野寺 彩 香

1. はじめに

日本語学習者向け教科書である『みんなの日本語初級Ⅱ』には次のような例文がある。

例 (1) 「渡辺さんはいますか」「あ、たった今帰ったところです。まだエレベーターの所にいるかもしれません」(『みんなの日本語初級Ⅱ』、p.170)

『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳・文法解説 英語版』をみると、「たった今帰ったところ」の部分で“she's just left.”と訳されていた。日本語の「帰る」には“leave”(去る)の意味があるのだろうか。

また、「家に帰る」「家に戻る」のように「戻る」に言い換えられる場合が多いことから、「戻る」は類義語であると考えられる。「戻る」が使われる場合、「去る」が使われる場合との比較を行いながら、「帰る」が有する意味を明らかにしていきたい。

2. 先行研究

本動詞として使われる「帰る」と「戻る」の意味を比較した先行研究としては、柴田(編)(1979)と、リグス(2017)の二つが挙げられる。

柴田(編)(1979)によると、「戻る」の到達点は主体が単に〈もと存在した所〉であるのに対し、「帰る」到達点は〈本拠地=主体が本来存在すべき所〉であることが両語の違いだという。しかし、「～に帰る」以外の文型であれば、以下の例(2)のように、本拠地になりえない場所である「信号」にも「帰る」を使用している例がある。

例 (2) 昼の交通のはげしいときは、歩行練習はできません。しかし、愛

媛県と高知県とを結ぶ国道ながら、夜中ともなればあまり車も通りませんから、安心して歩行練習ができます。信号から信号までが五百メートルですから、信号まで行って帰ると、一キロメートルと目標を決めて歩きます。(米田倫子『倫子、二十歳の旅立ち』リヨン社、1897)

柴田（編）（1979）では「客（押売り）が帰る」といった例について、「それまでいた地点を離れる」ということに焦点を合わせた用法である、としながらも、〈本拠地に到達する〉という意味も暗示していると書かれている。これは、前章に挙げた（1）の例文とも共通する点である。「客が帰る」や例（1）の状況で「渡辺さんは帰った」というような場合、“本拠地に到達することを暗示している”という説明で矛盾はないと考えることは可能である。しかし、「押売りが帰った」はどうだろうか。「押売り」はある人の家を出ても、その後隣の家を訪問するとも考えられる。“隣の家”は押売りの本拠地にはなりえない。よって、このような場合の「帰る」の使い方について、より詳しい分析が必要である。

「客（押売り）が帰る」については、文体差を除けば「去る」と入れかえ可能だと記述もある。話し言葉で「押売りが去ったよ」などと言うことはできないが、書き言葉であれば、たしかに「帰る」も「去る」も使うことができると考える。このことから、書き言葉における「帰る」と「去る」の違いを探る必要性があると言える。

柴田（編）（1979）で語られてきたような、到達点为本拠地か否かという動作主体と場の関係を問う視点以外から両語を比較した研究には、リグス（2017）の記述がある。

リグス（2017）によると、「帰る」はその全行程がスムーズに行なわれると意識された状況で使われており、話者にとって切れ目のない連続環を描く行程になっているという。対照的に「戻る」は起点を出てから何か中断が起こっている場合に使われ、何らかの要因による分断部を含有する行程になっていることが両語の違いだとしている。

リグス（2017）では、様々なジャンルの日本の番組を録画し、そこから採取したデータを使用している。そこで挙げられた例の中に、ドキュメンタリー番組にて息子が「(いよいよ手術室に向かう母親に向かって) 頑張っ
て必ず帰って来て」といった発言がある。この場合、確かに「帰る」が〈話者

にとって切れ目のない連続環を描く行程〉になっているといえる。母が手術室に向かった時から無事生きて手術室から出て来るまで、この一連の行程が、話者にとって、途切れることのない連続環という図式であったはずだからだ。一方、「戻る」の使用例としては、火災事故が起こった理由を説明する場面が挙げられている。ラーメン店の店主が鍋を火にかけてそのままその場を離れてしまい、鍋の空焚きが火災の原因になった、というものである。仕込み準備の途中でその場をいったん離れ、再びその場へ移動したことを、ラーメン店の店主は「戻る」を使って表現していたという。この例に関して、店主の「意識上の動作線は中断していたと考えられる」(p.117)と述べている。

この考え方であれば、例文(2)において、到達点が「信号」であるのに「帰る」が使用されていることの説明も付くと考える。この場合、話者は歩行練習のために信号間を往復しようと決めてから移動を開始している。つまり、話者の意識上の動作線に中断部がないから「戻る」ではなく「帰る」を使用したのだろう。

しかし、この考え方によっても、柴田(編)(1979)に対する問題点と似たような問題が生じる。「客(押売り)が帰る」といった表現や、例文(1)のような会話において、話者は動作主体の“全行程がスムーズに行なわれる”と意識して「帰る」と使用したとはいえない、という問題である。実際、以下のような使用例が存在する。

例(3)そして「魔笛」が一番好きなオペラになり、もう今までに数えきれないくらい聴いているのだが、内容に関しては今もってわからないのだ。舞台もたくさん見たが、満足そうに帰る客たちに交じって、どうもほくだけが不得要領な顔をしていたような気がする。(なかにし礼『音楽への恋文』共同通信社、1987)

例(3)において、話者である「ほく」は、客ひとりひとりの〈移動行程の連続環〉を意識して「帰る」を使用しているだろうか。「ほく」にわかるのは、舞台が始まったときにはいた客が、舞台が終わると同時にその建物を出て、どこかへ行ったということだけである。「帰る」という言葉を使用したとき、「ほく」の意識に〈移動行程の連続環〉はなかったのではないだろうか。

3. 研究の目的

本研究の目的は、今まで〈本拠地に到達すること〉や〈話者にとって切れ目のない連続環を示す〉と説明されてきた「帰る」の新たな意味説明を提示することである。その際、類義語である「戻る」や、一部類似性があると予想される「去る」との比較を行いながら、到達点や回帰行程という視点以外からの説明の方法を探る。そのための研究課題として以下の3つの問いを設定した。それぞれ、調査1～調査3によって明らかにしていく。

- ① 現在出版されている類義語辞典において、「帰る」と「戻る」の違い、「去る」との関係性はどのように記述されているか。
- ② 「客（押売り）が帰る」のような、到達点が〈本拠地〉でない「帰る」が存在することを踏まえた上で、「帰る」と「戻る」の違いは何か。
- ③ 書き言葉における「帰る」と「去る」の使われ方の違いは何か。

4. 調査1：類義語辞典における「帰る」と「戻る」、「去る」の扱い

4.1 調査対象と方法

今回、調査対象とする辞典は、①『角川類語新辞典』②『使い方のわかる類語例解辞典』③『類語大辞典』④『三省堂類語新辞典』⑤『正しい言葉づかいのための似た言葉使い分け辞典』⑥『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』の6冊である。

辞典①～④は、人間の動作、文化、自然…などのように、まずカテゴリーを設け、そのカテゴリーの中にあらゆる語を分類していくという方法を採用し、共通の意味を持つ語が一箇所に集まるように配列している。一方、辞典⑤・⑥は、意味が類似していて間違いやすいと考えられる言葉でグループを作り、その中の一つを見出し語とし、見出し語の五十音順で語を配列している。

以上の辞典すべてについて、それぞれ「帰る」「戻る」「去る」のどのような特徴について言及しているか表にして示す。

4.2 結果

「帰る」「戻る」「去る」が6冊の辞典でどう説明されているかをそれぞれ表1～表3に示した。辞典の記述において、「～という意味がある」と言葉で説明されていなくても、挙げられた例文がその意味で使用されているととらえ

られるものも○表記で表した。

表1.「帰る」の意味特徴

	①	②	③	④	⑤	⑥
本拠地へ向かう・到達する（人） 例「家に帰る」	○	○	○	○	○	○
回帰行程の着地点に到着し移動の目的が終了（人） 例「仕事が終わって家に帰る」				○		
元の所に移動する（物） 例「船が港に帰る」					△	

全ての辞典に「帰る」には“人が本拠地へ向かう・到達する”意味を持つとの記述があり（表1）、一方、「戻る」は“人が単に元の場所に向かう・到達する”という意味を持つと記述されていた（表2）。これは、柴田（編）（1979）と同様の結果である。

“回帰行程の着地点に到着し移動の目的が終了”という意味特徴は、使用例全てにいえることかどうかは不明だが、「帰る」特有のものといえるだろう。また、「帰る」の意味特徴として“物の移動”に言及している辞典はほとんどないことがわかる。そのなかで、辞典⑤のみ「物については言わないが、乗り物は例外」としている。表1の中にも挙げた例「船が港に帰る」は擬人法ともいえるとの記述がある。このことから、「帰る」の主体は、人または人を運ぶ乗り物だけであることがわかる。

表2.「戻る」の意味特徴

	①	②	③	④	⑤	⑥
単に元の場所に向かう・到達する（人） 例「交差点に戻る」	○	○	○	○	○	○
元来た方角へ進む（人）※目的地を問題としない 例「行き過ぎたので一〇メートルほど戻った」	○	○	○		○	○
進んでいった先にとどまらず引き返す（人） 例「忘れ物に気付いて途中で駅に戻る」	○	○		○		
元の所に移動（物） 例「盗まれたものが手元に戻る」	○	○	○	○	○	
元の状態・性質になる（状態変化） 例「振り出しに戻る」	○	○	○	○	○	○

表2からは、人と乗り物の移動だけに使われる「帰る」とは異なり、「戻る」にはそれ以外の用法もあることがわかる。まず、同じ人の移動でも、学校や家といった明確なある一つの場所を指すのではなく、漠然とした“方角へ進む”ことを指す用法がある。また、状態変化は全ての辞典に記述があったため、人の移動と同じくらい重要な「戻る」の意味特徴であるといえる。これに次いで○の数が多い意味特徴は、物の移動である。辞典②・⑤では、“物の移動”という説明ではなく、「なくした財布が戻る」のような例を状態変化に含めて説明していた。つまり、物の移動は状態変化の一部というらえ方もできる。半数の辞典に記述があった“進んでいった先にとどまらず引き返す”という特徴は、「帰る」の“回帰行程の着地点に到着し移動の目的が終了”という特徴と対比していると考えられる。「会社から家に帰る」ならばそれ以降続く第二の移動がないが、「忘れ物に気付いて途中で駅に戻る」ならば駅に着いたその後に、本来行くべき場所に向かうための移動が控えているのである。

表3.「去る」の意味特徴

	①	②	③	④	⑤	⑥
ある所から離れていくこと（人） 例「故郷を去る」	○	○	○	○		
いやなものを取り除くこと 例「雑念を去る」	○	○				
それまでの状態が消えてなくなること（状態変化） 例「痛みが去る」	○	○	○	○		
過去のある時点である様子。「この前の」 例「去る十日に結婚式を挙げた」	○		○			
距離が隔たること（遠近） 例「東へ去ること四キロ」	○	○				
時が過ぎてゆくこと（経過） 例「夏が去る」「今を去ること二十年前」	○	○	○			

表3は、辞典⑤・⑥には「去る」の項目がなかったため、辞典①から④の4冊の辞典の記述をまとめた。「帰る」「戻る」では、本拠地へ向かうか単に元いた場所へ向かうかが大きなポイントとなっていたが、「去る」は人の移動に関して、目的地は問題としないようである。人の移動と同様に、すべての辞典で記述されていたのが状態変化を表す用法である。例を見ると、「去る」は「戻る」とは正反対の意味を表していることがわかる。その他の意味として、時間の経過を表す用法などがあるが、全て「去る」特有のものである。

4.3 考察

現在出版されている類義語辞典において「帰る」と「戻る」の一番大きな違いと考えられているのは、目的地が本拠地かまたは単に元いた場所かという点であることがわかった。その例には「客（押売り）が帰る」のようなものも含まれており、先行研究にも現れていたこの問題点は、複数の類義語辞典の記述でも解決していないことがわかる。

「帰る」にはない「戻る」の特に重要な意味特徴は「振り出しに戻る」のような“元の状態・性質になる”という状態変化を表すことだと考える。「盗まれたものが手元に戻る」のような物の移動も、盗まれる前の元の状

態になったという状態変化に含むことができ、また、人の移動に関しても、“引き返す”意味を含む場合もあることから、人がある地点まで戻った結果、元の状態になったと解釈することも可能であるからだ。

次に、「帰る」「戻る」と「去る」の関係性について述べる。3語に共通する点は、人間の移動を表すことのみであり、「戻る」と「去る」は全く正反対の性質を持っている。「帰る」と「去る」について、その使われ方の違いを検討している辞典はなかった。そもそも、辞典⑤・⑥のようなタイプの辞典には「去る」の項目がないという事実がある。辞典①～④のようなあらゆる語をカテゴリーに分類していくというタイプとは違い、辞典⑤・⑥は、意味が類似していて間違えやすいと考えられる言葉でグループを作り、その違いを解説していくタイプである。このタイプの辞典に「去る」の項目がないということは、「去る」と意味が類似している言葉はないと判断されたからだと考える。たしかに、表3に示した「去る」の例文は「帰る」と入れ換えることができない。しかし、「客（押売り）が帰る」のようなタイプの例文だけは、「去る」と入れ換えても文が成り立つのである。この場合の使い分けを探る必要がある。

5. 調査2: 「帰る」「戻る」の実際の使用傾向

5.1 調査対象と方法

本調査のデータは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を対象に検索アプリケーション「中納言」を用いて、検索・収集した。「帰る」「帰った」「戻る」「戻った」で検索し、それぞれ50例ずつ計200例収集した。

5.2 結果

「帰る」「戻る」が使用された一文の中で、「～へ・に」などの言葉で、動作主体の到達点が明確に示されているかどうかという点で分類した。「帰る」が使用された文100例のうち、到達点が明記されていたものは40例であった。これに対して「戻る」は、100例中88例であり、「戻る」のほうが到達点を明確に示す割合が圧倒的に高いことがわかる。その「到達点」にあたる言葉には以下のようなものがみられた。

表4.「帰る」の到達点(全40例)

10例	家
4例	うち
3例	故郷
2例	東京 日本 国(くに) 本社
1例	祖国 ホテル 両親 場所 おまえのところ 京都 ロンドン 実家 …等

表5.「戻る」の到達点(全88例)

5例	元(もと)
3例	正常な状態 席 家
2例	ソファ 自宅 病院 東京 運転席 宿舎 車 祖国
1例	本社 京都 ゼロ 五年前の経済 パリ 平常心 ベッドルーム 自分自身 マンション 常態 居間 ベンチ 此处 病室 もととの自分 鮮やかな赤 列 道場 部屋 長崎 劇場 食卓の椅子 駅 シュトラスブルク 英本国 修道院 米国 日本 現実 ウィーン テーブル 出口のところ ホテル 時代 振り出し 崖のほう …等

表6.種類別「戻る」の到達点

①建物・施設・ 国・県・都市	本社 京都 パリ マンション 自宅 家 病院 道場 東京 祖国 長崎 劇場 駅 ウィーン シュトラスブルク 英本国 宿舎 …等
②空間・地点	ベッドルーム 居間 病室 部屋 車 列 ソファ ベンチ 此处 運転席 食卓の椅子 席 テーブル 出口のところ …等
③方角	崖のほう
④状態	元(もと) ゼロ 五年前の経済 正常な状態 平常心 自分自身 常態 もととの自分 鮮やかな赤 現実 時代 振り出し …等

「帰る」の到達点で最も多かったのが「家」、次点が「うち」である(表4)。その他の言葉を見ても、故郷、祖国、実家など、行動主体の本拠地と言って差し支えないものばかりである。さらに、「～へ」などの助詞で到達点が明記されていない残りの60例をみても、そのうち46例が行動主体の本拠地を表していた。国・町・施設等を指すものも含んでいたが、その大半が、以下の例(4)のように到達点が「家」と予想できるものであった。

例(4) その夜、九時頃、私の家の電話が鳴りました。「僕だ」刈谷の声でした。「ああ、あなた？今どこ？」「今、羽田に着いたところ。これから帰るから」「よかったわ。ご飯は？」「もういらない。福岡の空港で友達と夕飯は食べてきたから」(曾野 綾子『この悲しみの世に』主婦と生活社、1986)

例(4)は、「私の家の電話が鳴りました」とあり、夫からの電話を受けた妻が、家で夫の帰りを待っている場面だとわかる。このように、家で誰かが待っている描写があり、それにより到達点の家だとわかるタイプが多くみられた。このタイプの中には、「仕事から」「学校から」「パート/工場勤めから」のような言葉とともに「帰る」が使われる例が多かった。通勤・通学は誰もが毎日のようにすることであり、この結果は、リグス(2017)で提示された“回帰行程が自然な連続線を描く”という「帰る」の特徴とも一致する。

「客(押売り)が帰る」のようなタイプの例は100例中14例であるが、そのうちの一つが以下の例(5)である。これらはすべて、発話者と動作主体が異なっており、例(5)のような不特定多数の客・利用者が動作主体となっているものが最も多くみられた。

例(5) 土曜日の朝早く、ロー・スクールのまだ人けのない図書室に入ると、(中略) うんざりした。ジョージタウンの図書室は、(中略) 近所の小さなロー・ファームの弁護士などの利用が多い。本の整理の悪さは彼らの作業によるところもあるという。いずれにしても、建前の上では正義の実現に力を尽くすべきロイヤーやロイヤーの卵たちである。自分さえよければ後で利用する人のことはまったく考えずに、利用した判例集を元の棚に返さずに帰るという現象に、(中略) 一人悪態をつきながら目指す判例集を探し回ったものだった。(阿川 尚之『アメリカン・ロイヤーの誕生』中央公論社、1986)

一方、「戻る」の到達点で最も多かったのが「元」、次点が「正常な状態」「席」「家」であることから、状態変化を表すために使用されることが最も多いとわかる(表5)。また、「帰る」に比べて到達点となる言葉が様々だったため、4種類に分類したものが表6である。同じ場所であっても、「戻る」の場合、部屋、ソファ、ベンチ、列、席など、狭く限定的な地点も指し示すこ

とがわかった(表6②)。このような違いもあるが、「戻る」の到達点の中には「帰る」と同様、家、祖国、本社など本拠地と呼べるものも含まれていた。以下のような例である。

例(6) それで夜はケンタイで飲む。このケンタイという大阪弁はどこから来たのか分らないが、あたりまえ、当然というような意味で、当然だから誰憚ることもなく大きな顔で、というイメージがある。そういうわけで、長旅がつづくとも私もアル中になる素質は充分であるが、旅というのはつねに終りがある、旅の終りの打ち上げ酒をやって解散、という段取り、家へ戻ると私は一日机の前に坐り、朝も昼もアルコールは摂らず、夜だけ、という生活になる。アイソのない、カッコつかぬ生活を強いられる。(田辺 聖子『女のおせんぼ』文芸春秋、1987)

5.3 考察

「帰る」は助詞などを使って到達点を示す場合の方が少ないとわかったが、では、どんなときにわざわざ「家へ」などと到達点を示すのだろうか。一つは、以下の例(7)のように場所を強調したい場合であり、もう一つは例(8)のように“リセットと進展”を表したい場合だと考える。

例(7) 外出しても旅をしても、わが家に帰れば自分の茶わんがあって、それでごはんをたべたりお茶をのんだりするから家に帰ったという気持ちになります。毎日変わった茶わんが出てきたら、家にいる気分にならないでしょう。(吉沢 久子『愉しく老いる女の心支度』海竜社、1986)

例(8) ほくらも何だか気の毒なやうな、をかしながらんとした気持ちになった。そこで、一人づつ木からはね下りて、河原に泳ぎついて、魚を手拭につつんだり、手にもったりして、家に帰った。八月十四日 しゅっこは、今日は、毒もみの丹礬をもって来た。(宮沢 賢治『宮沢賢治全集』筑摩書房、1986)

例(8)を見ると、「帰った」の後、すぐ後日の話になって場面が変わっている。「帰る」の到達点としてよく使われるものは「家」であり、仕事や学校から家に帰るといふ文が多数見られたが、これらは、〈人がある場所に向

かう・到達することにより、元の状態から進展する〉ことを意味しているのだと考える。人々は毎日の通勤や通学を繰り返し、日々自分自身が更新されていくからである。

「帰る」の到達点が明記されていたものは使用例全体の半分にも満たなかったという事実から、そもそも「帰る」という言葉が“到達点の共有を必要としない話し手中心の語”であるとも考えられる。「帰る」という概念は、人それぞれにもともと決まった居場所があるという考え方に基づいているといえる。以下の例(9)「おまえのところ」のように、単なる建物というより、心の拠り所となりうる人物のもとに帰るととらえられる例も多々もある。そのため、他人に「どこに」と伝える必要性がないのである。

例(9) この探検が成功すれば、すべてうまく行く。ぼくは成功者として、大手をふっておまえのところに帰るつもりだ。(田中 光二『地の涯幻の湖』徳間書店、1987)

「帰る」が〈話し手中心〉の言葉であり、〈元の状態からの進展〉を表すことは、例(5)や「客(押売り)が帰った」という例からもうかがえる。例(5)では、利用した判例集を元の棚に返さずに出ていった利用者がいたことによって、その利用者が来る前は整頓されていた棚が、利用者が来た後は乱雑になっているという場面へ転じたことが想定される。そしてそれを良くないことだと感じている人物の目線から語られている。行動主体がどこへ向かうかということより、話し手の周りの状況がどう進展したかということに焦点が当たっているのである。

一方、「戻る」を使う場合のほとんどが「～に・へ」で到達点が示されていたのはなぜだろうか。「戻る」は“話し手と聞き手の間で常に到達点の共有を必要とする語”であるからだと考える。「戻る」の場合、表6で見たように、「列」「席」「出口のところ」あるいは「平常心」など多種多様な場所・状態が到達点になれるため、「～に」と言わないと正確な意味は伝わらない。

例(6)の到達点は「家」である。ここで「戻る」を使った理由は人の移動も状態変化と捉えたからではないだろうか。「長旅」「旅というのはつねに終りがある」という言葉から、この場合の「家に戻る」は単なる外と家の往復とはいえないことがわかる。長旅をしている最中の自分の生活と、それを

やめた後の生活では全く異なり、またいつもの家での生活が再び訪れることを「戻る」で表している。「戻る」の意味とは〈人がある場所に向かう・到達することにより、再び元の状態になる〉ことだと言えるのではないだろうか。

6. 調査3:「帰る」「去る」の実際の使用傾向

6.1 調査対象と方法

本調査のデータは、調査2と同様、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を対象に検索アプリケーション「中納言」を用いて、検索・収集する。「去る」「去った」で検索し、それぞれ50例ずつ計100例収集した。比較対象となる「帰る」「帰った」のデータは調査2と同様のものを使用する。

6.2 結果

調査2と同様の方法で、「去る」が使用された一文の中で、「～へ・～に」などの言葉で、動作主体の到達点が明確に示されているかどうかという点を調べた。その結果、明確に示されていたものは、100例中8例のみであり、動作主体は全て人物であった。これは、調査1の結果の表3に示された「ある所から離れていくこと」という結果とも共通する。調査2の結果を含めると、到達点が明記される割合が最も高いのが「戻る」、次が「帰る」、最も低いのが「去る」となる。「去る」の到達点は、以下のものがそれぞれ1例ずつであった。

表7.「去る」の動作主体と到達点

動作主体	「～へ・～に」で示された到達点
彼女たち	左に
ベレニス	カーテンの後ろの夕陽の方に
冴子	九州の大学病院へ
桐野	台所に
マッカーサー	東京に
女	その方へ
奥さん	裏手へ
登美子	遠く若狭へ

上記の表を、表4・表5と比較してみると、「帰る」と「戻る」の到達点には共通して「家」が見られたのに、「去る」にはないという違いがある。「戻る」と「去る」に共通してみられたのは方向を表す言葉であった。

次に、圧倒的割合を占める到達点が明記されていない「去る」の特徴を見ていく。

表8.「去る」が表す意味

意味	全92例中
①人（動物、団体名含む）がある所から離れていくこと	53例
②人が死ぬこと	20例
③日付、時間・時代の経過	12例
④状態変化	7例

上記の表の①が人間の移動、③が時間の経過、④が位置・状態変化にあたる。人間の移動を表す例が最も多いという結果になった。類義語辞典の調査では見つからなかった意味が②である。②のほとんどが、以下の例（10）のように「世を去る/去った」もしくは「この世を去る/去った」という表現で“人物の死”を表していた。また、時間の経過を表す例の中で最も多かったのは例（11）のような〈去る+日付〉であった。

例（10）この幸せな生活を送るヨハンが、あいつぐ不幸にみまわれたのは、千八百七十年のことである。最愛の母アンナが突然世を去った。（志鳥 栄八郎『大作曲家とそのCD名曲名盤』音楽之友社、1989）

例（11）去る二月五日、長崎の二十六聖人殉教者の日に、私は満五十歳の誕生日を迎えました。朝、ミサをたてながら、まずは良き家族に恵まれ、すばらしき友を得た身の仕合せを神に感謝致しました。（尻枝 正行『別れの日まで』新潮社、1988）

次に、人間の往来を表す①（表8）の例の中に「帰る」と言い換え可能なものがあるのかについて述べる。意味から判断すると、人間の往来を表す「去る」53例のうち、37例は“行動主体が出発した地点に再び現れることがない”ことを示すという理由で「帰る」との言い換えが不可能であるという結果になった。この場合、以下の例（12）のような「場所+を去る/去った」

という文型が多く見られた。残りの16例は、例(13)のように主に通過点を示す「去る」であった。

例(12) 父親はアムンセンが十四歳のときに死んでおり、母親はアムンセンを医者にしたいと考えていたため、アムンセンは探検家になる野心をかくしていたのである。母親の希望にしたがってアムンセンは大学の医学部にすすんだが、目的は探検家だったので、そのための鍛練や読書に熱中し、成績は普通以下だった。二十一歳のとき、そんな息子の野心に気づかないまま母親は亡くなった。するとアムンセンは、もう母親の希望にしたがう必要もなくなったため、全力を探検のためにささげるべく大学を去った。(本多 勝一『アムンセンとスコット』教育社、1986)

例(12)は大学を退学したことを示していて、もう同じ大学に通うことは二度とないことを表している。もし、「大学から帰った」にした場合、退学したということが伝わらなくなってしまう。このことから、「去る」は「帰る」と違って、行動主体が出発した地点に再び現れることはないことを示しているといえる。

例(13) 大部屋の隅に場所をとり、並んで座った二人は、日が暮れる前に、道端で買い求めた丸餅を、分けあって食べる。宿は次第に混む。行商人や旅芸人、旅僧、下級の侍、町家の者たちなど、旅人の顔は様々である。(中略) 八雲にいい寄る旅人もいた。彼女が歩き巫女の姿をしているからだろう。「うるさいわね」と、八雲は、柳眉を逆立ててきっぱり断る。「なんだい、えらそうに」と、男はぶつぶついいながら、去る。(荒巻 義雄『猿飛佐助』角川書店、1990)

これは、八雲という女性の前を通過点とする旅人の移動を示している。この場合、「帰る」と言い換えても文は成り立つ。旅人の男に対して何の関心も抱いていない八雲の様子から、これ以降会うことはないと思っていると考えられる。読者の視点からも、男が旅人であることや、そこが宿という一時的な滞在のための場所であることから、この二人が今後再び出会う可能性はほぼないことがわかる。

他の例に「風のように去った」という表現が見られた。「風のように帰った」とは言わないことから、この表現は「去る」の“通過”という性質を示すいい例だと考えられる。例(13)の八雲にとって旅人の男は、まさに近くを通り過ぎていく風と同じ存在だったのだろう。

6.3 考察

「去る」を使用する場合、動作主体の到達点を示すことはほとんどない。到達点を示さない代わりに、「～を去る/去った」の形で出発点を示す例は多くみられた。

また、「去る」の実際の用例をみて以下のことが分かった。

- ①人の死を表わす例、日付や時間・時代の経過を表す例が多い。これらは、その人とは永久に会えないこと、その日にちを再び過ごすことができないことを意味している。
- ②「去る」には主に“行動主体が出発した地点に再び現れることがない”こと示す用法と“通過点”を示す用法がある。
- ③②の前者は「帰る」との言い換えが完全に不可能であり、後者は「帰る」に言い換えても文が成り立つ場合がある。

言い換え可能な「帰る」と「去る」がある中、その語選択の要因は、動作主体の移動が話者にとって一過性のものと感じるか、それとも、循環性を持つものと感じるかという点にあると考える。「去る」の例文(13)では、八雲はいい寄る旅人に対し、ひとことできっぱりと断っている。これは一瞬の出来事であり、八雲は旅人の行動を自身にとって一過性のものと感じたと考えられる。「帰る」の例文(5)では、動作主体は図書室の利用者である。利用者は入れ代わり立ち代わり図書室を訪れる。「一人悪態をつきながら目指す判例集を探し回った」人は、本棚を整理しても、また再び乱雑な状態になるだろうことを想像して、利用者の行動が循環性を持つものと感じられたのだろう。「客(押売り)」が自宅に訪問した場合を想定するなら、その人物が出て行っても、自宅の玄関にはまた別の人物が繰り返し出入りするだろうし、例(3)で「去る」ではなく「帰る」を使うのも、劇場にはまた翌日来客が途切れることなく訪れることが予想されるからである。

7. まとめと今後の課題

本稿では「客（押売り）が帰る」という用例に焦点を当て、「帰る」と「戻る」の意味説明の仕方を探ってきた。また、今まで類義語として比較検討されてこなかった「帰る」と「去る」の違いも調査した。その結果、「帰る」は到達点の共有を必要としない話し手中心の言葉であり、〈人がある場所に向かう・到達することにより、元の状態から進展する〉ことを意味し、「戻る」は話し手と聞き手の間で常に到達点の共有を必要とする語であり、〈人がある場所に向かう・到達することにより、再び同じ状態になる〉ことを意味しているという可能性を示唆した。

また、“行動主体が出発した地点に再び現れることがない”こと示す「去る」は、「帰る」に言い換えできないこと、言い換え可能な場合の語選択の要因は、動作主体の移動が話者にとって一過性のものと感じるか、それとも、循環性を持つものと感じるかという点にあることを明らかにした。

しかし本稿では、「帰る」「戻る」「去る」の活用形は過去形しか調査することができなかった。他の活用形を含めて調査しても同様の結果になるか、調査することを今後の課題としたい。

参考文献

- 大野晋・浜西正人（1981）『角川類語新辞典』角川書店
柴田武（編）（1979）『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社
柴田武・山田進（編）（2002）『類語大辞典』講談社
小学館辞典編集部（1994）『使い方のわかる類語例解辞典』小学館
スリーエーネットワーク（編著）（1998）『みんなの日本語 初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク（編著）（2012）『みんなの日本語 初級Ⅱ第2版 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク
田忠魁・泉原省二・金相順（編著）（1998）『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』研究社出版
中村明・芳賀綏・森田良行（編）（2005）『三省堂類語新辞典』三省堂
リグス秀美（2017）「「帰る」と「戻る」の使い分け：認知言語学的視点からの一考察」『日本語日本文学』第27号
類語研究会（編）（1991）『正しい言葉づかいのための似た言葉使い分け辞

典』創拓社

「帰る」の意味分析——「戻る」「去る」との比較から——